

学 位 論 文 要 旨

氏 名 寺元 幸仁

題 目 教師の「遊びなおし」と
子どもが主体的に活動する造形遊びに関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

導入から40年が経とうとしている「造形遊び」であるが、教育現場で十分に取り組みられているとは言えない。導入以降、「造形遊び」は、学習指導要領において、「遊び」の特性を生かした子ども主体の造形活動であると示され続けている。また、子どもは、表現することによって新たな意味や価値を主体的に学んでいく存在である。にもかかわらず、教育現場で「造形遊び」が浸透しないのは、教師主導から子ども主体へ、教師の指導観の転換が困難であったことが要因ではないかと考えられる。

教師が学ぶ機会としては、「研修」の場が考えられるが、これまでの研修は教師にとって受け身的な内容が多かったため、教師の「造形遊び」に対する意識を変容させる効果はなかったと言わざるを得ない。そこで、教師が主体的に取り組む研修プログラムの開発が有効ではないかと考えられる。本研究では、この研修プログラムを「遊びなおし研修」と呼び、教師が「遊び」の主体となることで、「遊び」の楽しさを実感し、子どもの頃の感覚に立ち返り、「遊び」の教育的意義を体感する「遊びなおし」体験と、子どもと大人の異なる視点から「造形遊び」を往還的に問い返す「とらえなおし」活動を組み合わせ取り組んできている。また、事前と事後アンケートを比較することで、本研修参加による変容を参加者自身が認識できるようにしている。

本研究では、「遊びなおし研修」に参加している教師の行為や活動の様子、アンケートの回答内容を、大谷尚が提唱する質的データ分析手法 SCAT と回答内容をテキスト化し分類する手法を用いて分析し、教師の「造形遊び」に対する意識の変容について考察を行っている。そして「遊びなおし研修」の成果と今後の展望について論じている。

第1章では、問題の所在と本研究の目的を示し、「遊びなおし研修」の意義について述べている。また本研究で使用する「遊びなおし研修」等の用語について整理を行っている。

第2章では、本研究で扱う「造形遊び」について、その内容や意義等を改めてとらえなおしている。

第3章では、「造形遊び」に生かす「遊び」の特性や教育的意義について述べている。ピアジェを含め4名の研究者「遊び」論を取りあげ、「遊び」の意味や特性を整理した。また、近年の幼児教育研究者や美術教育研究者が考えも取り上げ、「遊び」の起因や意義を明らかにしている。

第4章では、実際に子どもが遊ぶ様子から、「遊び」における「学び」が、どのようなものなのかについて論じている。また、小学校1年生と3年生の「造形遊び」の実践から、「造形遊び」において、子どもが様々な資質や能力を発揮しながら学んでいることを論じている。

第5章では、「図工・美術実態把握アンケート」(平成25年)の回答から、「造形遊び」が楽観的には語れない状況にあることを述べ、その傾向が、図工専科の配置が多い都市部以外の地域の方が顕著に見られることを指摘している。

第6章では、全3回の「遊びなおし研修」を取り上げている。第1回では、土ねんど、第2回では新聞紙、第3回では紙コップを材料として、参加者が遊ぶ「遊びなおし」体験を行っている。「とらえなおし」活動の内容としては、第1と2回は、子どもの「造形遊び」の映像を観た後、意見交流する活動、第3回は、「遊びなおし」体験の活動を参加者同士で「評価」し合い、それらをもとに意見交流する活動を行っている。参加者の行為や活動の様子、アンケートの回答内容や追調査を分析し、「造形遊び」に対する意識の変容について参加者の全体的な傾向を論じている。

第7章では、「遊びなおし研修」を経ることで、「造形遊び」を実践し始めた参加者3名について、アンケートとインタビューを実施し、個々の参加者に見られる「造形遊び」に対する意識の変容について論じている。分析の際に、アンケートの回答内容は大谷尚が提唱する質的データ分析手法 SCAT、インタビューは回答内容をテキスト化し分類する手法を用い、最終的にはそれぞれの分析内容を比較し、「遊びなおし研修」の効果と課題を論じている。

第8章では、第6章と第7章で述べた「遊びなおし研修」の効果と課題の整理を行い、本研究の成果と今後の展望を示している。教師には、「『造形遊び』に対する好感度が上昇」「実践する意欲の向上」「不安や疑問を一定解消」をはじめとする変容が見られた。そして「遊びなおし研修」への参加をきっかけに、意欲的に教材研究を開始し実践する、「造形遊び」に対して主体的に取り組む教師が増加するという成果が確認されている。

今後の展望としては、参加者自身が主催者となり、参加者同士で関わり合いながら材料や内容を決定していくなど、より参加者の主体性や自由性を尊重する「遊びなおし研修」の展開についても示している。また、これまでの参加者は20代30代が多かったことから、ベテラン層の教師を巻き込む形や、比較的「造形遊び」に対して研修が取り組まれている都市部に勤める図工専科対象に取り組んでみる形も考えられる。

本研究において、継続的に「遊びなおし研修」に参加することで、「造形遊び」の教材研究に主体的に取り組むとともに、実践化に向けた意欲が一層高まることも明らかになっており、継続して取り組んでいくことが何よりも重要であると考えられる。